

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No.38 2013年11月

政府機関関連への協力	アイオワ州政府駐日代表の後継者リクルートに当たって……………	2
企業支援	498日間のミャンマー駐在を終えて……………	3
教育	日本貿易会／ABIC／関西学院大学／青山学院大学共催プロジェクト……………	4
	高校生国際交流の集い……………	4
	「日本の食文化」を学ぶ……………	6
	法政大学ISG講座（英語）を終えて……………	7
留学生支援	東京国際交流館での活動……………	8
	2013年国際交流フェスティバル……………	8
	秋の新入館者歓迎バザー……………	8
私のボランティア活動	フィリピン人技能実習生に日本語を教えて……………	9
エッセー	ABICとのつながり—異世代、異分野間交流の11年……………	10
新刊紹介	『実業家とブラジル移住』……………	11
	会員の種類……………	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数……………	12
	賛助会員入会のお祝い……………	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

アイオワ州政府駐日代表の
後継者リクルートに当たってアイオワ州政府駐日代表 **まきの 牧野** **のぶひこ 伸彦** (元 三菱商事)

58歳で三菱商事を退職し、アイオワ州政府日本事務所の代表に転職した。その後17年余りになり75歳になった。業務の内容は、日本からアイオワへの投資誘致が60%、アイオワ産品の対日輸出が40%だった。

投資誘致活動は、いわゆるコールドコールが主体となる。これはダメ元で飛び込み、アイオワ州の企業立地の利点を話すわけだが、相手企業からは「お話を承りました」と、こちらの立場に配慮した返事が来る。企業の担当者は、たとえ案件を抱えていても、会社の稟議も通っていない段階で喋るわけにもいかない。大企業では事業部別に案件を持っていて、他の事業部の案件を、たとえ知っていても話さない。知事など州政府の関係者が訪日した際、アイオワにすでに進出している企業に訪問するのも大切な業務だ。州は日本企業を歓迎していることを常に発信していなければならない。現地のパッシングを進出のリスクと捉えるのが一般的だが、その心配がないことを訴え続けるのだ。

アイオワ州は、全米の中で一、二を争う大豆・トウモロコシの主産地で、それから派生する豚肉・鶏卵の最大輸出州だ。大豆業界の人を招いてセミナーを開き、アイオワ産大豆の品質と安定供給を訴え、食肉使節団を伴い輸入先を訪問したりした。

ところが2012年6月にアイオワ州政府側よりあと1年で、つまり2013年6月いっばいで引退してはとの肩たたきがあった。アイオワ州日本事務所を構えていた千代田区一番町のビルが取り壊されることになり、事務所を移転存

続させるかどうかの岐路に立つ時期と重なった。検討の結果、経費節減のために日本事務所を廃止し、在宅業務とすることになった。その上で、退職勧告を出したその私に後任を探してほしいとの依頼

があった。このような依頼は珍しいと思いつつも承した。

そこで他にも後任を当たったが、以前に事務所の投資担当の採用にも協力していただいたABICに募集の協力を依頼したところ、関事務局長と西山コーディネーターに快く引き受けていただけることになった。

上記の目的に合う人材をと依頼し、下記をその基準とした。

- ・ 貿易経験最低5年
- ・ 英語と日本語に堪能
- ・ 良いreference
- ・ 北米駐在経験

契約期間は2013年7月1日 - 2014年6月30日を最初とし、1年ごとに更新、との条件を付けてABICより募集をかけていただいた。それに対し、幸い6名の方に応募をしていただいた。

2013年2月に、その6名の方々と州政府経済開発機構理事長をはじめスタッフ数名とSkypeで面接をしたいとの要望があり、幸い6名の方々もSkypeの準備ができていたので実行された。アイオワから面接のために訪日するのは旅費が掛かるので、Skypeで間に合えば確かに効率的ではある。Skype面接の結果2名に絞られた。その2名と理事長との直接の面談が4月19日に成田のヒルトンホテルで行われ、最後に廣瀬一郎さんに決まった。お願いしてから5カ月の長い時間がかかったが、その間ABICの西山コーディネーターに辛抱強くご協力していただき深謝している。

なお、州政府から小生に引退勧告があったので後継者探しをしたのだが、その後州政府の気が変わり、牧野にもう少しやってもらいたいとオファーがあった。それを受け7月1日からは廣瀬さんと、それぞれの自宅で業務を行っている。廣瀬さんが投資担当で牧野が対日輸出担当である。



Branstad州知事執務室で 筆者(左)

アイオワ州ClarindaのNSK社の前で
廣瀬さん(右端)と

498日間のミャンマー駐在を終えて

みつくり さとし
三栗 敏 (元 伊藤忠商事)

私はABICの紹介で2008年1月15日に外務省に入省し、同年4月から2010年1月まで在カンボジア日本国大使館で一等書記官として勤務していた。

大使館在籍中にお会いしたフォーバル社の大久保秀夫会長からの要請を受け、2011年7月からミャンマーのヤンゴン市に駐在し、2012年11月帰国した。およそ50年の鎖国から目を覚まし、テインセイン大統領の新政権が進める民主化で変貌するミャンマーの駐在498日間を振り返ってみたい。

ヤンゴンの第一歩

2011年7月10日（日）の夜7時ごろ、バンコク発タイ航空TG305便にてヤンゴン国際空港に到着。予想外にきれいな空港にちょっと安心感を覚える。空港から市街地に走る幹線道路にバイク、自転車、シクロを見ない。乗用車、タクシー、バスが結構なスピードで走っており、ほとんどが1990年代の日本の中古車である。車窓から見る人々の表情は穏やかで落ち着いて見えた。アジアの他の都市とは違う風景である。これがミャンマーに対する最初の印象であった。

事務所の設営

日本企業のミャンマー進出を支援する体制づくりが小生のミッションである。まずは事務所設立の仕事に取り掛かった。事務所の活動許可と登録申請を国家計画経済開発省に提出し、承認を得るまでに6ヵ月を要した。事務所探しも簡単ではなかった。急増する需要に供給が追いついていないので、事務所賃貸料は売り手市場で高騰し、東京並みの水準である。住居賃貸料もホテル室料も滞在1年半で約3倍に跳ね上がった。完全なバブル状態である。

インターネット環境は劣悪であった。スピードは遅く、重いデータは送れない。問題はスピードだけではない。頻繁に起こる停電にも悩まされた。

ミャンマーの銀行業務の鈍さには驚かされた。現金の引き出しには2時間を要する。銀行内の業務は全てが手書き作業である。一方、金融改革は急ピッチで進められており、昨今、民間銀行では外国企業の口座開設も容易にできるようになり、海外からのドル送金も可能となった。2012年4月より、多重為替レートが廃止され、実勢レートに一本化されたことは大きな変革であった。

テインセイン大統領

2011年3月に発足した新政権への国際社会からの評価は日増しに高まっていった。テインセイン大統領の民主化、



高村元外務大臣に同行し、テインセイン大統領と面談

政治・経済改革、国民和解を基本に置いた政策は一貫しており、国民が実感できる改革の達成を強調していたのが印象的である。経済改革のためには外国からの支援は不可欠として、外資誘致を積極的に進めるための、法整備、金融改革を推進している。政治犯を含む囚人の解放、アウンサンスーチー氏との協調路線、カチン州で中国が進める水力ダム建設の中止宣言、少数民族間との停戦合意などを矢継ぎ早に実行し、その結果、欧米の経済制裁緩和を引き出した政治手腕は評価される。

ミャンマーの水祭り

ミャンマーの水祭りを知らずしてミャンマーは語れない。ミャンマーの4月のカレンダーはお休みの赤マルが10個並び、4月は仕事にならない。水祭りはミャンマー暦に従った新年に先立って行う伝統的祭りで、昔のミャンマーの伝統により、人は1年の汚れを水祭り（ミャンマー語でティンジャン）の水で洗い流すと自分の心がきれいになると信じている。精神的にも肉体的にも純粋な気持ち



ティンジャン（水祭り）の水を浴びて
歓喜するミャンマーの若者たち

はあふれかえる。

信心深いミャンマー人

世界で一番大きく美しい仏塔といわれるシェエダゴンパゴダを訪れると、この国の人たちの仏教への信仰心の深さに感心させられる。床に座り静かに瞑想にふける老人、頭を床に付けて願い事をする若い女性たちの多くを見ることが出来る。仏の教えが今も多くの若い人たちに引き継がれている。

ミャンマーの魅力

潜在的な可能性の大きいことがミャンマーの魅力だ。6,200万の人口と親日的なことが新たな生産拠点や市場としての可能性を秘め、日本にとっては大きなビジネスチャンスだ。ミャンマー人は勤勉で、労働者の士気は高い。賃金は2012年1月時点でタイの4分の1であり、ベトナム、カンボジアよりも安い。観光の魅力も大きい。自然の美や他に類を見ない遺跡の数々が存在する。荘厳な寺院や悠久の景観を誇る、神秘的で魅惑的な国である。どこを訪れて

も、人々が温かく迎えてくれる。心に安らぎを与えてくれるミャンマーの魅力は無限である。

おわりに

ミャンマー歴史の1ページともなる新生ミャンマー誕生の時代に遭遇できたことは幸運であったと言わざるを得ない。その機会を得るきっかけをいただいたABICに心より感謝申し上げたい。今後はこの貴重な経験を生かして、ミャンマーへの日本企業進出の支援活動に関われば幸いと考えている。



ミャンマーのランドマークである
シェエダゴンパゴダ

教育

日本貿易会 / ABIC / 関西学院大学 / 青山学院大学共催プロジェクト

高校生国際交流の集い

日本貿易会・ABICは関西学院大学と第7回、青山学院大学と第6回の高大連携プログラム「高校生国際交流の集い」を開催した。

この催しは2007年度からABICと関西学院大学、並びに青山学院大学の共催で関西と関東でスタート、日本と海外の高校生の交流を大学生が企画から運営まで中心的役割を担いつつリード、大学教授、社会人が側面支援を行う産学協同の試みとし、互いに異文化理解を深めることを目的とした高大連携教育の一環として、日本と米州、欧州、アジア・大洋州諸国の高校生が寝食を共にして語り合う国際交流の場を提供している。

関西は民間国際教育交流団体のAFS日本協会大阪支部、日本国際交流振興会（JFIE）、および神戸龍谷高等学校が、また、関東はAFS日本協会東京支部が協力団体として参加した。

関西（7月25-26日）

“Break the wall”をスローガンに2013年も関西学院大学上ヶ原キャンパスに高校生と留学生が集まり、2日間にわたる「高校生国際交流の集い2013」が開催された。参加高校は、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立千里高等学校、私立啓明学院高等学校、関西学院高等部で、高校生計35名が参加した。一方、留学生は、AFS、日本国際交流振興会、神戸龍谷高等学校のご協力で、米国、イタリア、フィンランド、スイス、ベルギー、インドネシア、タイ、マレーシア、中国、豪州、ニュージーランドから計28名が参加した。

初日は、山本関西学院大学副学長による開会の挨拶に続き、グローバル関西学院院長が参加者の心構えを優しく英語でお話された。次いで、交流行事の中核を支える関学学生スタッフの紹介が行われ、プログラムがスタートした。昼食後のレクリエーションで高校生、留学生が互いに打ち

解け、「貧困」、「仕事」、「国際交流」、「教育」、「出会い」、「識字率」をトピックとする6つのグループに分かれ、大学生スタッフの指導により、ディスカッションを開始した。夜は、宿舎でのレクリエーションで交流をさらに深め合った。

2日目は、日本を紹介するイベントの他、高校生がディスカッションにうまく適応できるよう大学生スタッフが配慮をしたり、励ましながらグループディスカッションを継続した。最後に、各グループのトピックをベースにした「世界幸福に貢献する」ためのアイデアを、各グループがおのおの工夫をして発表した。審査の結果、優秀賞、準優秀賞に加え、プレゼンテーション手法の特徴を表した特別賞の発表と賞状、賞品授与に続き、関ABIC事務局長より閉会の挨拶があった。歓談が続く中、関学研究推進社会連携機構の石原部長より参加者全員に修了証の授与が行われ、盛会のうちに終了した。行事に参加した高校生と留学生は、これからもSNSを通じて、お互いにつながりを保ってい

こうと話している姿に、コミュニケーション手段の変化の流れが感じられた。

この行事も2013年で連続7回と回数を重ねてきたが、最近、高校生としてこの行事に参加し、関学に入学後、学生スタッフとして高校生をリードするという大学生スタッ



ディスカッション指導風景

関東 (7月27-28日)

震災の影響によりやむなく中止となった2011年を除き、2007年より毎年実施されてきており、2013年も丸紅(株)の協力により丸紅多摩センター研修所にて開催された。今回はABIC CAMP 2013と銘打ち「Dive!! -to discover something new-」の主題の下にグループごとに独自・個別にテーマを決め、討議を行った。参加した高校生は、青山学院高等部、横浜市立横浜商業高等学校、横須賀学院高等学校、神奈川県立相模原高等学校から20名、米国、ベルギー、スペイン、イタリア、ブルガリア、ハンガリー、ベネズエラ、コスタリカ、タイ、モンゴルから来日中のAFS交換留学高校生18名の計38名。リード役はAFSボランティア大学生、青山学院大学生の計11名。日本側高校生の中には英語は苦手だが、外国の高校生との交流を希望する生徒もあり、またAFS交換留学高校生は日本語研修が来日目的ということでもあるので、交流の場では英語のみならず日本語も可とした。

例年、開会の場では特に日本側高校生に緊張の色がうかがえるが、今回も大学生スタッフの巧みなリードもあって最初から打ち解けたムードとなり、交流の場にふさわしい雰囲気ですスタートした。

その流れでゲームを楽しみ、お互いにリラックスしたところで、全体ワーク、グループディスカッションに入り、



プレゼンテーション

フがうまくまわってきた。行事を続けてきたことによる効果の一端を示すものであり、共同主催者として喜ばしいことである。2014年は、学生スタッフがどんな機軸を考えてくれるか楽しみである。

(関西デスクコーディネーター まつお けんじ たちばな ひろし 松尾 謙二・橘 弘志)



参加者全員で

1日目の夕食後には2012年も好評であったグループ対抗のファッション・ショーが行われ大いに盛り上がった。

2日目午前中もグループごとのディスカッションが進められ、最終プログラムで各グループによるディスカッションの発表会が行われ、参加者全員による投票で選ばれた最優秀グループが関ABIC事務局長より発表・表彰された。

次に希望者より本キャンプに参加しての感想が述べられたが、短い間にもかかわらず異文化に接することができ貴重な体験となったこと、英語が苦手だったけれど思い切って参加して将来に一步踏み出せた感じが持てたこと、これを機に将来留学を考えたい、等々、ABICキャンプが目指した高校生間の交流がなされ、今回のテーマたる「Dive!! -to discover something new-」がそれぞれの生徒に起こったと思われた時であった。

最後に堀内青山学院大学教授のスピーチと参加者全員の記念撮影で無事2日間の幕を閉じた。

今回の具体的な企画から実行面でリードし、本キャンプを実りあるものに導いた大学生スタッフの事後の感想・提案も踏まえ、2014年度がさらに充実した国際交流の集いとなるよう努めていきたい。

(小中高校国際理解教育コーディネーター かわまた じろう たかつか けんじ 川俣 二郎、高塚 謙次)



閉会式の後で

教育

「日本の食文化」を学ぶ

いがり まゆみ
猪狩 眞弓 (大学講座担当コーディネーター、元 三井物産)

今般、富士山の世界文化遺産登録に続いて「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ世界無形文化遺産として登録される見込みとなった。すでに登録されている食の分野ではフランスの美食術、地中海料理、メキシコの伝統料理、トルコのケシケキ料理があり、それに続く今回の日本の登録となる。2012年3月に申請され、登録推進活動が行われていたが、この動きは海外での日本食ブームを受けたクールジャパン戦略の一環でもある。

私はABIC会員の方から紹介を受け、農林水産省食料産業局において、2012年4月から日本の食文化推進事業外部審査員としての活動を行っている。審査員の仕事とは、農林水産省の公募事業に応札してきた事業者の提案内容を書類審査し、審査会でプレゼンを聞き、質疑応答の上評価を行って1社を決定するものである。2013年度は特に「日本の食を広げるプロジェクト事業」が中心で、具体的には「海外における日本食・食文化普及人材の育成事業」として、海外の料理学校・食関連事業者・流通業者・教育機関・日本料理コンペ・シンポジウム開催・日本酒伝道師育成・功労者表彰などの事業審査に携わっている。

この審査員としての採用理由は学歴教育歴の他、三井物産食料部門における30年間の在籍実績が重視されたと聞く。「知見を生かして」という期待にどう応えるべきか。自信のなさからの学びの出発だった。まずは「和食」を学ぼうと、関連書籍等情報収集、毎月の会席料理教室、味の素食の文化センター主催セミナーや各種シンポジウム等への参加、そして「和食検定」への挑戦を計画した。和食検定テストは1級合格率9.3%という難関だった。受験会場



2013年春学期多摩大学で「日本の食文化」を講義

ではおそらく私が最年長だったが、退職後10年に及び大学生活で体得した学習癖が奏功し、幸いうまく突破できた。身近な食に関する学びは大変興味深く楽しいものである。直近に参加した「日本の料理文化博覧会」というシンポジウムは、まさにユネスコ世界無形文化遺産登録に向けてのデモンストレーション的な催しであり、大いに盛り上がった。

これらの活動をバネに、大学でも若い世代に日本の食文化を伝えたいと考えた。ABICが2009年から提供している多摩大学「世界の食文化」講座は、海外駐在経験豊富な素晴らしい会員による講師陣によって好評を博している。しかし、学生からのアンケートで、自国の食文化を知りたいという声が寄せられていた。このことに自ら応えたいというものである。実際に今回担当してみて、学生たちが知らないことが多々あることに驚かされた。授業で入手したりアクションレポートでは、イタリアンや中華などにはよく行くが、和食専門店はあるのかとか、自分の国の食文化なのに一度も学ぶ機会がなかったということが書かれていた。現に小学生の「食育」は盛んだが、大学では考古学あるいは栄養学の一部として扱われる程度で、食文化という研究領域自体まだそれほど確立されていない。だが、私自身「日本の食文化」研究をひも解いてみて初めて、大陸からの文化を受容し、自国の文化としてきた日本の食文化史の重みを感じている。今後も農林水産省の日本の食文化推進事業と関わりながら、大学での講座についてもABICからさらに拡大発展させていきたいと考えている。



2013年10月10日「日本料理文化博覧会」会場で

教育

法政大学ISG講座（英語）を終えて

かゆみ こういち
家 広一（元 東京三菱銀行）

私は旧東京銀行（現三菱東京UFJ銀行）と銀行退職後の他の会社で、米国等4ヵ国、通算18年間の海外駐在勤務を経験した。

ABICには2012年の夏に会員登録したが、数ヵ月後にABICから連絡があり、法政大学・海外交換留学生（2013年度は13名受講）向けに「国際金融」の講義を受け持つほしいとの要請があった。講義は4人の講師によるオムニバス形式で、私は2013年4月の3コマ分（1コマ90分）の「直接金融」を任された。銀行出身の私は「間接金融」が専門で、証券会社が主体となる「直接金融」は門外漢である旨伝えたが、ABIC会員には証券業界の会員がいないとのことで、できる範囲という前提で講師を引き受けた。

講義の1コマ目と2コマ目は、法政大学市ヶ谷キャンパスの教室で、「直接金融」と「間接金融」の違い、証券業界用語等の概括的説明や日本の株式・債券市場について、具体的数字を使用し解説をした。特に安倍政権が強力に推し進めている「アベノミクス」は重点的に解説した。また、講義の合間を利用して、日本の特異性なども学生と議論した。

3コマ目はキャンパスを離れ、東京証券取引所を見学した。学生たちは全てコンピューターによる日本の株式取引に、大いに興味を持ったようだった。東証側の英語が堪能な女性ガイドによりツアーもスムーズで、学生の質問にも親切に回答してもらい、東証ツアーは大変好評だった。

全講義終了後のレポートの課題は、日本の全般的な印象について記述させた。ほとんどがフランスからの留学生だったが、全員異口同音に「日本は全く異文化・異環境の

国」、治安の良さ、清潔さ、食事のおいしさ等やコンビニの便利さを高く評価していた。また、日本のアニメ・漫画、ハイテクやファッションにも興味を持っている学生も多かった。一方、日本では外国語が通じないことに不便さを感じたと、日本の国際化の遅れについての指摘もあった。日本人として、こちらもいろいろと教えられ、文化の違いを感じる興味深いレポートが多かった。

今回、教壇に立ったのは初めての経験だったが、海外からの若い留学生を相手に英語で講義するのは、普段はなかなか味わえない楽しい経験だった。このような貴重な機会を与えていただいたABICにあらためて感謝したい。現在は、再就職サイトで勤務しているが、またお役に立てるような機会があればと思っている。



東京証券取引所で

留学生支援

東京国際交流館での活動

2013年国際交流フェスティバル

8月24日（土）、ABICの留学生支援の拠点である東京国際交流館で国際交流フェスティバルが開催された。猛暑の中、2,500人を超える参加者を迎えて、中庭の交流広場では十数カ国の料理食べ比べの屋台、ドキドキショッカーブレイランドやショッカーステージ&抽選会、夕刻からは夏の風物詩の盆踊りと、さまざまなイベントが終日行われた。

館内では創作人形展示、マジック&ジャグリングショー、

ドラえもんキャラクターショー、おもちゃ手作り・手ぬぐい藍染・法被作り・日本料理などの体験と盛りだくさんのプログラムが続いた。

ABICは月例日本文化教室講師の方々のご協力の下、華道、書道、茶道の展示やデモンストレーションと体験教室を開催し、300名ほどの参加者に日本の伝統美に触れる機会を提供した。



秋の新入館者歓迎バザー

10月26日（土）に第24回の新入館者歓迎バザーが開催された。今回は台風27号の進路が関東地方に影響があるとの予報があり、雨天と強風を前提に来場者の安全と混乱を避けるため、バザーの室内2ヵ所での開催および模擬店等の取りやめが早めに決定された。そのため交流館在住者を中心としたこぢんまりした催事となり、在住者にはこれから必要な冬物衣料等をゆっくりと選んでもらった。

このような悪条件下での開催だったが、ABIC会員、支援企業とその社員、日本貿易会役職員各位からの寄贈品は200箱を超え、ほぼ10万円の売り上げを得ることができた。売上金は従来通り交流館の留学生への支援金として提供された。

今回のバザーにも6名の会員が日本語広場や日本文化教室の説明や勧誘ならびにバザー会場整備に活動した。



(留学生支援担当コーディネーター)

私の
ボランティア活動

フィリピン人技能実習生に日本語を教えて

くにちか もとこ
國近 素子 (ABIC 会員)

私はABIC主催の日本語教師養成講座の卒業生です。エコロジー促進事業共同組合が外国人技能実習生への集中日本語研修の女性講師を募集しているとの情報を得て、応募し採用されました。

まず7月に富山県の国立立山青少年の家で6日間教え、今回8月は奈良県の国立曾爾（そに）青少年自然の家で6日間日本語講師をしました。曾爾村是最寄りの三重県名張市近鉄名張駅からタクシーで断崖絶壁の香落溪（こおちだに）を延々と、標高700メートルあまり登ったところにあります。斜面を一面にスキが覆い青い絨毯を広げたような爽快な草原です。夜は満天の星が降り注ぎます。

エコロジー協同組合は過去7年にわたって多くの外国人実習生を日本に紹介しています。実習生は本国で1年間日本語を勉強したのち、試験と面接を受けて選ばれた優秀な若者たちです。入国したらすぐに青少年自然の家に入り、日本で生活し働くにあたって必要なことを1ヵ月間、学びます。専用テキストは各種書類記入の仕方に始まり、日本で健康で安全に暮らすためにとか、会社の期待に応えるためにとか、すぐにも必要な日本語が順序良く学べるようになっています。日本語学習のみならず消防署の職員による火災予防、警察官による交通安全や詐欺被害予防オリエンテーション、弁護士による法的保護の講話も受講したあと、1ヵ月後にそれぞれの企業に配属され、工場で3年間正社員として働きます。

技能を学び、お金を貯めて、帰国後は親のために家を建てる、新しいビジネスを立ち上げる、大学に入って勉強するなど未来に希望がいっぱいなのでそれはよく勉強します。クイズ形式で単語の意味や言い回しに寸暇を惜しんで取り組みます。

食事はbuffestailなのでおいしいおいしい

と山ほど取って食べます。牛乳もフィリピンでは高く飲んでないと毎食コップ2杯くらい飲みます。食べ残しや飲み残しの多い日本人は贅沢に慣れてしまっていることを実感してしまいます。

曾爾自然の家には夏休み中ということもあって幼稚園から小、中、高校、大学のサークル、オーケストラ団員の合宿に至るまで各地から200人から300人余りが入れ代わり立ち代わり宿泊しています。朝の会と夕べの会では全員が参加し国旗掲揚と降納、ラジオ体操、それに各グループの代表が自分たちの紹介をします。

実習生は「私の名前はサンドロです。エコロジー協同組合の実習生です。フィリピンから来ました。日本の技術を学んで働くために日本語を勉強しています。2週間前に日本に来ました……どうぞよろしくお願いします。」などとあいさつします。

壇上に立って200人を超える日本人が注目する中で大きな声ではっきりと話すことはものすごいプレッシャーです。はじめは途中で詰まって言葉が出なくなりましたが日に日に上手になっていきます。組合の高野理事長は「話そうと思うことは100回以上声に出して練習すること、それが練習だ」とか「国旗掲揚の時フィリピンでは胸に手を当てて敬うだろう？日本では胸に手を当てる必要はないが両手を体の横にまっすぐ伸ばして姿勢を良くして敬意をもって見上げなさい」とか懇切丁寧に指導されていました。

彼らが日本で無事に働くことができるよう、そして何よりもフィリピンに帰って成功することができるよう願ってやみません。

日本語講師として熱心に日本語を学ぶ若者たちの教育の一部に参加させていただいたことを光栄に思っています。



屋外で 筆者（前列左端）



授業風景

エッセー

ABICとのつながり —異世代、異分野間交流の11年

日本香港協会監事 ふじかわ 藤川 かずひろ 一弘 (元丸紅)

現在ABIC活動の現場は離れているが、前回寄稿から久しいことや、直近のEL NEOS (Business情報誌)「私の読書スタイル」への寄稿が契機で、長年のABICでの活動報告をとの依頼があり、幾つかに絞り込んで随筆風にまとめることになった。

1) 国際医療協力NPOとの出会い (ABIC会報No.10)

ABIC会員登録 (2001年) から間もなく、初代事務局局長M氏から、設立直後のNPO法人HANDS (国際医療協力分野) の組織完成までの財務顧問はどうか?との話を頂き、喜んで引き受けたのが始まりであった (“Noと言わないABIC” の会員として当然の反応だった)。「商社OB 初のNPO顧問」との触れ込みもあり、結果次第では、将来ABIC会員のNPO交流の道が開けるかもしれないと、少々肩に力が入った半面、miss-matchingで異星人扱いされないか? 立ち上げ協力ならごく短期か?との思いで、契約は3ヵ月ごとで始まった。それが何と、AIDSや母子保健等の途上国の医療に真摯に立ち向かう内外の医師や、海外志向型の若い世代との交流が深まり、結局2005年まで4年のお付き合いとなった。さらに驚いたことに、(これも、時折想像もしない展開があり得るABIC活動の一面だが)次は(財)結核予防会・財務顧問への横滑りで (HANDSの推薦)引き続き2010年までの5年間、結核予防のため地球狭し

と飛び回る医師や関係者との協力が続いた。ちなみにここでの私の役割は、予防会が初めて米政府系のUSAID資金を活用したため、同機関独特の厳しい監査に対処する窓口が必要となり、たまたまHANDS時代に「USAID会計になじんだ商社OBがいた」というのが種明かしのようだ。

2) 各種教育機関での講師役と授業Syllabus創作の楽しみ

顧問と並行して派遣講師も引き受け、2002年ごろに早稲田、明治のOpen Collegeに始まり、数名の商社OBと共に社会人向け外為・国際金融講座を担当。皆で教科書を編集した縁もあり、いまだに当時のABICのCoordinatorや後任講師も交え居酒屋談義を楽しんでいる。海外講義では、Banda Aceh大津波直後 (2005年1月) のMedanで、ASEAN Workshopに各国から参集した若手経営者に感じた未来志向のvitalityがいまだ印象に残っている (ABIC会報No.13)。次に、200名を超えるmass 授業での英語講義、初舞台は別府APU (2009年までの5年間) の初年度で、Themeは ‘Communication skills’ だったと思う。当時無謀にも、“7% (words) 38% (tone of voice) 55% (body language) rule” で有名なDr. A. Merhabianの説を紹介し、例えば、“I didn’t say he took my book” の、Iから順番に7文字のど

れにstressを置くかで意味が皆違うことを、身ぶり手ぶりで話した記憶があるが、これはその後何年か講義を続けた自分への指針にもなった。もちろん、冷や汗もののcommunication errorもあった。声が小さく聞き取りにくい質問には、質問の反復を怠って的外れの答えで失笑を買うやら、逆にピンボケ質問に対しては、こちらから講義の要点を反復した上で質問を訂正させる等の配慮を欠いたこともあった。一方、大学生20名前後の少人数学級での、複数講師の



講座打ち上げの日に学生と

いわゆるOmnibus方式の在り方については、かねて大学側のneedsや、学生の趣向もくみ上げた上で「Coordinatorと講師が一緒になって独創的で付加価値のある授業を提供できないだろうか？」という願望があった。これが早くも2011-12年の一橋大外国留学生対象の「日本型経営」講座で実現する。すなわち、大きなThemeがABICと大学で決められた後、Syllabusでは、日米（欧）比較経営議論といった内容に編曲し、一種の「提案型授業」に最も熱心に取り組まれたCoordinator T氏・M氏のadviceを受けながら、講師全員で一貫した講義案を作ったが、加えて、経営学と現実のbusinessの距離を縮める意図もあった。これには意外に恐ろしいこともある。

例えば受講生集めの成否は初日の「講義説明会」にかかっていると一言してもよく、この講義で学生が得られる果実は何か？双方向授業を目指しているか？複数講師での講義がどんな糸でつながっているか？等を明確に伝えないと、学生たちは、講師の英語力を含む発信力やpresentation技能を瞬時に見抜

いて、それにより対応を変えてくる。従って講師側も原稿の棒読みはご法度、事前に全員のresumeを共有し、事後には講義内容や引き継ぎ事項を知らせる等緊密なteam workが望まれ、学生に劣らぬ緊張感を味わうことになる。幸いこの2年の講義の後、従来あまり想定されなかった内外の日本企業への就職志望学生が多いと聞くが、授業から何らかの果実を得てくれたのかも知れない。

あとがき

以上言い尽くせぬことも多いが、長い間温かいご指導、お付き合いを頂いたCoordinator(s)と、分野を超えた多彩なOB仲間の皆さまに厚く御礼申し上げます。定年後の1st stageをABICとのつながりとすれば、今は定年後の2nd stageへの入口、もはやto-do listも不要なのんびり生活へ。Golfごんまいとはいかぬまでも、新たなchallengeには、球の位置や風向きをみて、経験を踏まえた最適のclubを選んで対応したいと思っている。

新刊紹介

『実業家とブラジル移住』 2012年8月刊

くりた まさひこ
栗田 政彦 共著 (ABIC会員、元 栗田工業、
財団法人日伯経済文化協会(ANBEC)専務理事、ABIC虹の架け橋教室事業共同代表)

公益財団法人渋沢栄一記念財団研究部編
A5判・上製・270頁 定価3,800円+税

移民送出は戦争と共に日本の近代化過程での大事な歴史である。戦前期の日本人ブラジル移民史への研究は多角的、学際的に拡大したが、日本の近代化や産業化を担ってきた実業家たちの移住事業への貢献については、あまり詳しく研究されてこなかったことを共通認識する者たちが、移民100周年(08年)にシンポジウムを行うと共にその研究を一冊にした。渋沢栄一、岩崎久彌、武藤山治、平生釰三郎ひら おはちさぶろうの4人の実業家を取り上げた。彼らは単に実業界で一流の働きをしただけでなく、近代化の矛盾に悩む国家の諸問題にも積極的に関わった。その貢献事例のひとつが、ブラジル拓殖事業に人口過剰や経済問題の解決を求め積極的に関わったことである。本書では、各著者が事例を通じて、彼らの移民事業に関する考えおよび事業推進について、また国策や外交に関する考えを検証することで、今日の実業家の公益への積極的取り組みを喚起する。

私は、第4章で「平生釰三郎とブラジル」を執筆した。4人のなかで、平生はブラジルに渡航した唯一の実業家で、しかも2度にわたる。東京海上保険(株)の専務取締役をはじめ、川崎造船(株)社長、日本製鉄(株)社長など多くの企業経営に携わったサラリーマン経営者の平生は、昭和初期にブラジル拓殖事業大改革による移住者の生活安定ならびに経済使節団を率いて2年間で当時の日伯貿易額を20倍に激増させ、さらには国家的経済文化交流の礎を築いた。今日の民間外交推進のためのヒントも多い。



会員の種類

種類	内容	年会費		
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	1口	50,000円
		個人	1口	10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体	1口	10,000円
		個人	1口	5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	—	—

正会員

団体・法人（18社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (一社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 協同木材貿易(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（9社）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 寛郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男
 岡 素之 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三

賛助会員

法人（3社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ キーリサーチネット(株)

個人（401名）

下記は2013年6月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈1口〉 相澤 裕 赤尾 義弘 池田 正久 植木 正憲 大木 隆
 糟谷 純一 閑林 亨平 小池 拓夫 須藤 寛 徳田 均
 都丸 啓吉 藤森 伸知 山内 文裕 山下 勝博 渡邊 春樹

活動会員 2,404名

(2013年10月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp